水俣病詩集「戻らぬ命」

～百八つの水俣病患者の思いや手記から～

水銀ヘドロが埋め立てられた水俣湾埋立地の一角、
親水緑地にたたずむ無数の石地蔵。
水俣病で家族を亡くした人の手によって彫られました。

「母ちゃん、シャクラ（桜）はまだ？早ようシャケ（咲け）ばよかとに」と言うのがログセでした。
桜咲く入学の直前、口からあぶくを吹き、幼い命の灯は消えました。

子どもを学校にやる時がくればなぁ、親はえらいうれしかとバッテン…。
ランドセルをかろわせて、学校にやらんばち思うとった途端にこんな姿になってしもうて…。
ほんともう、何んとも言われん悲しかった。

歩くことさえできず、言葉もしゃべれず、両足は曲がってかたまり、よくひきつけを起こしていました。
睡眠薬の効果もなく、一日中泣き続け、肺炎を併発し亡くなりました。
死んだあとは、看護婦さんがそっと目を押さえながら「死に化粧」をしてくれました。

「父ちゃんの酒のサカナにする」と浜に出て、よくカキを取っていた娘は、
わずか五歳で「目が見えんよう」と狂いながら死にました。
奇病解明のために、無理やりに解剖された遺体を、人目をさけて線路づたいに背負って帰りました…。

娘は体をエビのように折り曲げられると、脊髄から液を採られました。
全身に震えが走り、地獄のような泣き声を上げ、
「モロロイ、モロロイ（家に戻ろう、戻ろう）」と泣き叫んどりました。
何もわからず、ただ原因究明のための検査で…。

ある朝、娘が遅うに起きてきて、土間に降りろうとしたら、足がもつれてなぁ。
歩きならんじゃった。
そして、言葉もよう喋りならんごとなっとった。
そらもう、びっくりした…。

当時、娘のような症状の子供さんが、十五人いるとのことでした。
研究のためと、時には背中から水を採るといって、ヒーヒー泣く子供の体を曲げて採っている。
先生たちは「十五人のうち、誰かが死ねば、解剖してわかるんだけど」と言っていました…。

小中学校の運動会は、いつも見学でした。
かなわない手足が悔しくて、母親に「この手と足を打ち切ってくれ」
と泣きながら頼んだことが何度もありました。

「オカーサン……。チンパイ（心配）。ジブンデ、センバンチ、オモエバ……」
胎児性の娘の口ぐせなんです…。

写真【一人立ちもできなくなった少女】

娘は生まれて三ヶ月たっても目も見えず、首もすわらなかったので、心配になり病院に連れて行きました。
お医者さんは、子供の体をよく見もしないで、
「駄目ですね。一生当たり前の姿にはならないでしょう」と冷たくはねました…。

夢にまで描いたランドセル姿を見ることもなく、
娘は二年八ヶ月付き添っていた母の許から去っていきました…。

生まれたときよりこもう（小さく）なって曲がって死にました。
墓は石いっちょ（一つ）乗せとるだけです。赤子でしたけん…。

口もきけぬ、手足もかなわぬ、人形みせてもこの子は何ちゅうことはありまっせん。
でもやっぱり生きとっとですな。
人の来てくれるとばわかっとる風です。

二歳六ヶ月で死んだ娘を待っていたのは、他の胎児性の子供たちの為にという解剖でした。
その部屋は炊事場のようなところで、
『出刃ぼうちょう』や『さしみぼうちょう』のようなものが置いてありました。
「その上に乗せて下さい」と命令する先生。
このまま連れて逃げたいのをがまんして目をつむり、置いてきました。
ごめんなさい…。

せっかく三歳までは順調に育ったのに、人間に生まれながら、食べることを忘れ、
大便小便ができなくなり…本当に残念でなりません。

「シンダ、オネンチャンヲ、モドシテ、モラッテ…」
「ワタシモ、ニンゲンミタイニ、ハシッタリ、ウマク、シャベッタリ…」
「モトニ、モドシテ、クレント、ヤロカ？…」

娘には鼻から管を入れ、流動食を作って朝、昼、晩、針のない注射器で鼻から入れてやっていました。
生きてさえおれば、そのうち原因がわかって、良い薬や注射もできて、
きっと治ると思っていましたが…。

失明、発作。熊本大学病院入院。
「もううちに帰ろう」というのがログセでしたが、ついに口もきけなくなり、
「もう、もう…」とだけ口走りながら息を引きとりました。

写真【水俣病の苦しみにあえぐ少女】

「指がなぁ、こん指がなぁ……」と老いた漁師は悔しさを押し殺しながらつぶやいた…。

十年十ヶ月もうめき続けました。体が硬直。
食べることもできず、最後は注射だけとなり、息を引き取りました。
死後、やっと水俣病と認定されました。

ケイレン、発熱、目が見えず小便を漏らしたりしました。
全身を卵の黄身より黄色いと思うほど変色させて…
血便が続いた末に死にました。
父の肝臓と胆のうは腐っていました…。

あの頃はバタバタやられおったもんな。
昨日まで達者かったバッテン、もう今日は動ききらんようになって…。
おじさんも昨日までげんきも元気やったが、明けの日はもう話もでけんごつなって…。
おそろしかも恐ろしかった。

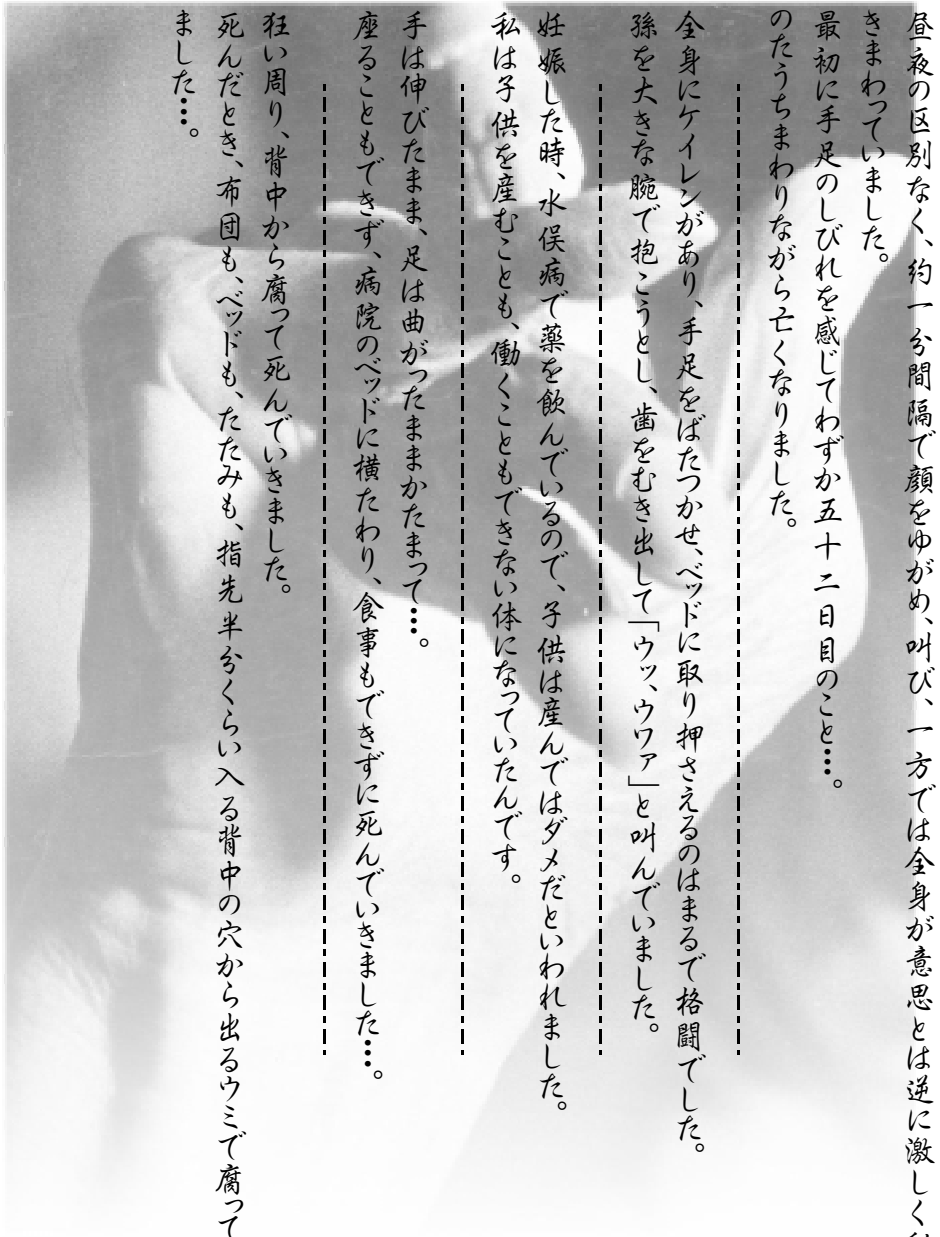
狂死。
昼夜の区別なく、約一分間隔で顔をゆがめ、叫び、一方では全身が意思とは逆に激しく動きまわっていました。
最初に手足のしびれを感じてわずか五十二日目のこと…。
のたうちまわりながら亡くなりました。

全身にケイレンがあり、手足をばたつかせ、ベッドに取り押さえるのはまるで格闘でした。
孫を大きな腕で抱こうとし、歯をむき出して「ウッ、ウワァ」と叫んでいました。

妊娠した時、水俣病で薬を飲んでいるので、子供は産んではダメだといわれました。
私は子供を産むことも、働くこともできない体になっていたんです。

手は伸びたまま、足は曲がったままかたまって…。
座ることもできず、病院のベッドに横たわり、食事もできずに死んでいきました…。

狂い周り、背中から腐って死んでいきました。
死んだとき、布団も、ベッドも、たたみも、指先半分くらい入る背中の穴から出るウミで腐っていました…。



写真【水俣病で異様に折れ曲がった指】

よだれを流し、手足はもつれ、震えていました。
一日一日と症状は悪化し、十一年もジワジワと苦しんで死んでいきました…。

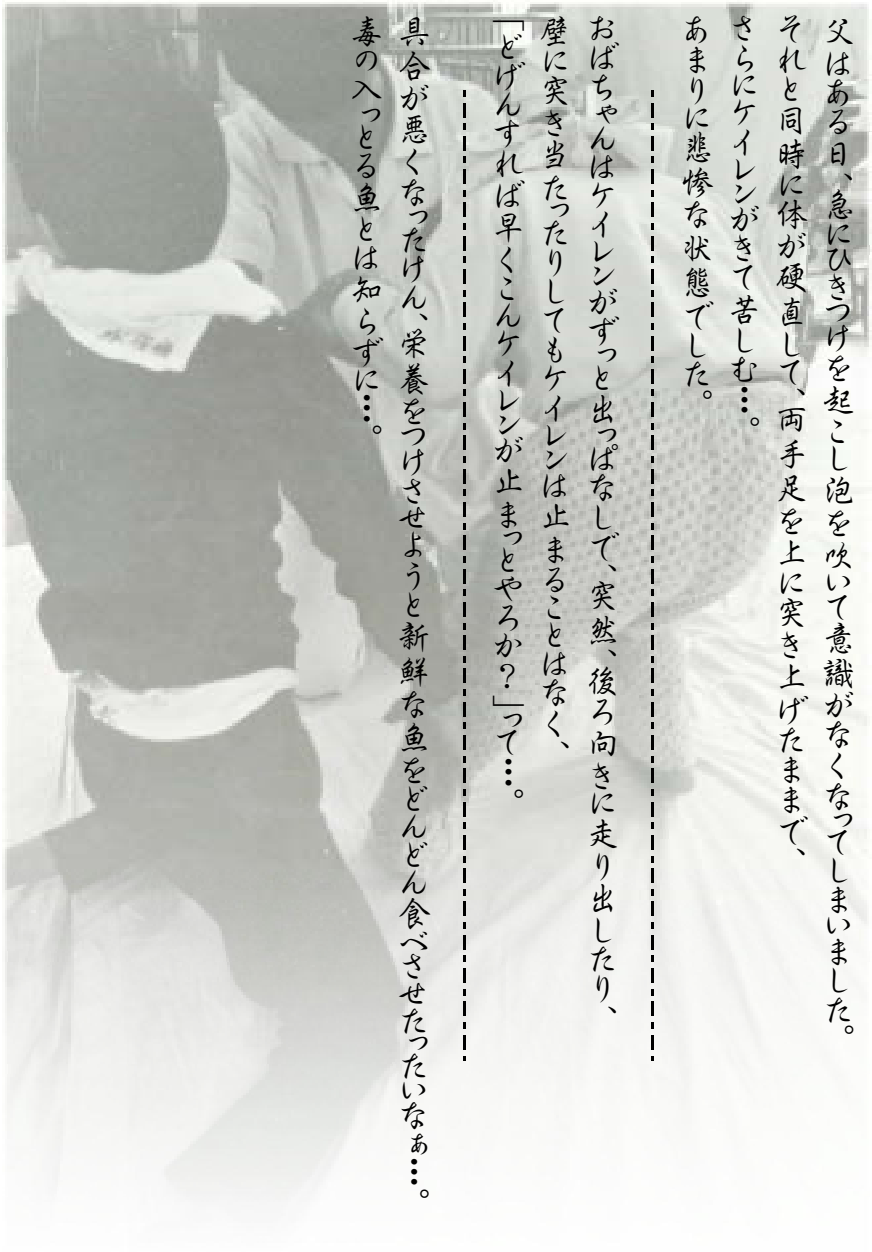
水俣市立病院で人前をはばからず裸になり、屋上から何度も飛び降りようとしました。
大相撲のテレビを見ていて目のかすみを覚え、わずか三ヶ月でこの世を去りました。

カミソリで両手首を切って自殺しようとしたこともありました。
その後も手足をばたつかせて暴れ、奇声を発し、食事も受けつけませんでした。
衰弱、狂死…。

「ウーッ、ウーッ」とうめき、のたうち回っていましたが、突然バタッと動かなくなりました…。

こんなとこに嫁に行ったから、こんな体になってしもうたと思ってしまうとです。
よくよく考えると、漁師部落に嫁いで当たり前んように魚や貝を食べただけなのに…。

「モトノの…カラダに…モドシテ…クレ…」ただ、それだけです…。



父はある日、急にひきつけを起こし泡を吹いて意識がなくなってしまいました。
それと同時に体が硬直して、両手足を上に突き上げたままで、
さらにケイレンがきて苦しむ…。
あまりに悲惨な状態でした。

おばちゃんはケイレンがずっと出っぱなしで、突然、後ろ向きに走り出したり、
壁に突き当たったりしてもケイレンは止まることはなく、
「どげんすれば早くこんケイレンが止まっとやろか？」って…。

具合が悪くなったけん、栄養をつけさせようと新鮮な魚をどんどん食べさせたったいなぁ…。
毒の入っとる魚とは知らずに…。

写真【苦痛のリハビリを嫌がる少女】

「うちが死ねば、誰が娘を看病してくれるとやろ。かわいそか可哀想か」
と言いつづけて母は死にました…。
わたしが、奇病にさえかからんば…。

実の娘でも、もがき苦しむ父の姿は恐ろしかった。
そしてのたうち回りながら狂い死にした兄。
「もういやだ」と家を出て行った弟。
水俣病の体で夫を看病し、苦労だけを背負って亡くなった母。
そして自らも水俣病に…。
「あれなもんでした。水俣病ちゅうやつは、本当に…。」

なんでもいいから仕事をしたい。
ばってん皿洗いに行けば、茶碗は落とすし、
水にさわれば手足が冷えてすぐ引きつってしまうとです。
昼間少し動きすぎると、夜寝ようとしても、両足のつけねから引きつり、いたくて痛くて、
いっそのこと「足を切ってしまってくれ」と叫びそうになります。

水俣病となった今ではハシも握れません。
「も、と、の、からだ、に、もどせぇ…」とかなわぬ口で叫ぶ。

「(ヒューッ)……海……ボラ……ナマコ……昔の……海……」
「チッソに……(ヒューッ)……罰ば……罰ば……」と言って夫は死んでいきました。

最初の頃、奇病にかかった人達はかわいそうで見ておれんやった。
口に言い表せんような地獄やった…。

中学卒業の時、水俣病の症状があるので就職のあっせんをしてもらえませんでした。
結婚しても流産を三回し、子どもが生まれても、めんどうみれず、
子どもに悲しみだけしか与えられませんでした…。

この先、行くとこは納骨堂しかなか。楽しみはなんもなか…。

水俣病さえなければ、この子はきっと優しく、美しく育ったとやろな…。

写真【水俣病で異様に折れ曲がった足】

腰から下があっちこっちねじれて曲がり、ケイレンが続きました。
最後はもがくように苦しい顔をして息たえました。
発病前はお嫁に行く話もまとまりかけていたのに…。

劇症型で苦しむ父に、
「死なれるものなら、早よう死なせてやりたかね。まこて苦しかっやろね」
と母は泣きながら語りかけていました。

死んで解剖されたら、娘はやっぱり胎児性水俣病でした。
包帯でぐるぐる巻きになった娘を抱いて帰った母親は
「わたしの分まで毒をとりこんで死んだとね」と、一晩中泣き明かしました…。

お腹の子供の為にと…毎日魚を食べました。
でも、生まれてきた娘は七ヶ月になっても、首がすわらず目も見えんかったとです。
七五三の晴着を着せても、人形みたいに動かんで…。

生まれてから死ぬまでの二十一年間、何ひとつおねだりしてくれなかった…
「この二十一年間、言いたかことは、いっぱいあったろうになぁ」
「ひとこと、父ちゃん、母ちゃんと言ってほしかった…」

年ごろの娘二人が廃人で、恋愛も結婚も無縁です。
虫のように生きているのが不びんでならんとです…。

ベッドで苦しみもがく夫に、「父ちゃん、しっかりせんね！」と励ましましたが、
それでもベッドから落ちる夫の体を拾い起こして、
「父ちゃん、悔しかねえ」と泣きくずれました…。

夫は部屋の板壁を突き破り、手足を血だらけにして死にました。
その九日後に娘が生まれ「父ちゃんの分まで生きてくれ」と語りかけましたが、
そのかいもなく二歳の時に亡くなりました。

一ヶ月ほど前、突然歩けなくなり、チッソ附属病院に入院、肺炎を併発して死にました。
解剖された我が子をかついで線路の上を歩いて帰りましたが、すでに軽くなっていました。

写真【母から施しを受ける少女】

昭和三十五年に待ち望んで生まれた娘は、生まれてから二ヶ月間泣きどうしでした。
泣かんごうなったと思ったら死んでしまいました…。

二十歳になった娘は食事も排便もできず、ただ「アーアー」と意味不明の笑いをする。
看護がなくては生きられない。
「この先も一生水俣病ば背負わならん…と」

私たちは生涯、この子のいるかぎり泣いて暮らすとです。
娘がたった一日でもいいから、私より早く死んでもらえればと…。
そんな汚い心まで持っている親なんです…。

「ああ重くなった重くなった。ばってん、この子はこんなに重くなってもまだ赤ちゃんじゃねぇ」
「いつまでたっても赤ちゃんじゃねぇ…」と胎児性患者の母はつぶやいた…。
母親にとってどんなに悲しいことでしょうか…。

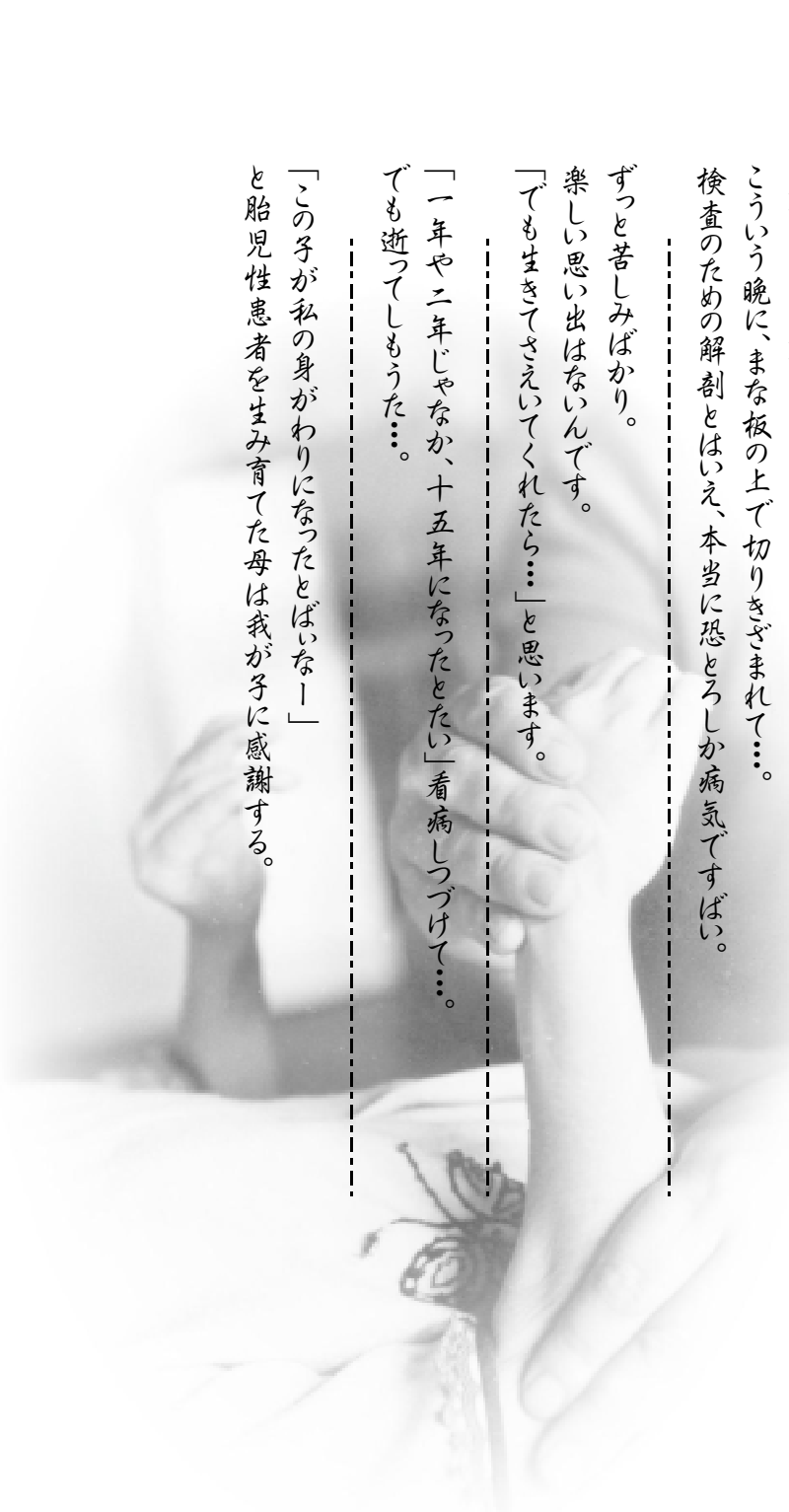
おらんだった私達にやっと授かった子供でした。
でも、四つになって、すぐおらんようになってしもうた…。
あんまりたい！

寒かろうて寒かろうて…。
こういう晩に、まな板の上で切りきざまれて…。
検査のための解剖とはいえ、本当に恐とろしか病気ですばい。

ずっと苦しみばかり。
楽しい思い出はないんです。
「でも生きてさえいてくれたら…」と思います。

「一年や二年じゃなか、十五年になったとたい」看病しつづけて…。
でも逝ってしもうた…。

「この子が私の身がわりになったとばいなー」
と胎児性患者を生み育てた母は我が子に感謝する。



写真【ケイレンを抑える母の手】

胎児性の娘を残して先には死ねません。
かわいそうですが、私より一時間でも先に死んでほしかです…。

「大小便の世話やら水俣病の介抱には、こんなに手がかかるとね」
「私が水俣病になったら生きちゃおられんね」と言っていたおばさんは、
その後、自分が水俣病にかかると、入院後二ヶ月で自らの命を絶ちました…。

歩行、言語、知能障害などを持つこの子に青春はない。
愛も恋も知らず、一生を終えると思うと…。

一日百回近くもケイレンが起きて、
父ちゃんのケイレンを地震ち思うて夜中に飛び起きたこつもあります…。

発病した主人を見て、
「あんたは息子になんば食べさせたつな」
「何も食べさせとらんから、こんな姿になってしまったとじゃろ」と義理の父から叱られました。
なんで大事な主人に、そんなことするもんですか…。

娘の「死に顔」を見た時、目は閉じられ異様に窪んでいました。
死後、水俣病の研究のため解剖され、眼球もとられたからでした。
私は涙が出るのをおさえ切れませんでした…。

妹は急にご飯をこぼしたり皿を落としたりして、父にひどく叱られました。
ところが翌朝にはもっとひどくなって、足がもつれて歩けなくなり、ようしゃべれんようになって、
病院に入院しました。
それでもずっと泣きっぱなしで、ものも言えなくなり、目も見えなくなって、手足も曲がり、身
体もエビが曲がったようになってしまいました。
そして昼も夜もずっと泣いて、泣き続けて死んだんです。
話せば淡々としてしまうんですけど…。
妹は本当にくるしんで苦しんで死んでいったんです…。

歩けぬ娘のため、七五三の晴れ着を買う親の気持ちが分かりますか…。

死んで脳を開くまでしても、認められないなんて…。
水俣病の苦しみは本人と家族にしかわからんとですよ。

写真【母に抱かれる胎児性患者】

二十五歳の時、関西の会社に就職しましたが、
同僚から「あんたも水俣病ではないの」「水俣病はうつるから」とか言われました。
テレビに水俣病のことがでると、みんな笑って見ていました。

「このままここにいたら、奇病が伝染ってしまうから家出する。」
「死んだと思って、行く先は探さないでくれ！」
そんな書き置きを残して息子は姿を消しました。

娘は解剖され、縫い合わせてホータイとかしてありました。
腹わたのない子でも私にすれば娘なんです。
タクシーに乗せようにも運転手さんが気色悪がって乗せてくれなかったから。
人目をさけて線路の上を歩いて、抱いて帰りました…。

そん頃は原因がわからんもんで、奇病にかかっとる子供をかろうてバスに乗っとる人がおれば、
「こげん子ば遠慮なしにバスに乗せて！」とか言われおった。
そらぁ難儀なバス乗りじゃった…。

人様のように家庭も持ちたかったし、子供もほしかったんです。
でも自分の体のことを考えると、相手の方に申し訳ないと思い、縁談もことわりました。
結婚できない自分の体がはがゆく、うらめしく、残念で涙が出てきます…。

私はこんな体でも働きたくて…。
でも私が水俣病だからという理由で、雇ってくれるとこもありませんでした。
人間の人間としての扱いをしてくれませんでした。

奇病患者の出た家の子供になってしまった男の子は、
遊び友達もいなくなって一人ぼっちになった…。

水俣病は急に起こって、家族の誰か一人がかかれば次々にかかっていくもんで、
やっぱり「伝染病」と思ったたいな。
保健所の人が消毒にきたりして…「伝染病じゃ、伝染病じゃ！」って…。
あそこの子とは遊ぶなっち言うて…。

母が病気になり、
「あんたたちは、いよいよ『伝染る病気』になったけん、部落ば歩いてくれるな」と役員の方が言いにきました。
それまで堂々としとった父が裏道を歩くようになりました。
それが悔しかった…。

写真【廃船を一人見つめる胎児性患者の少年】

患者さんの家の前ば通る時は、口ば押さえて息ば止めて走ったり。
伝染病と思い込んで「誰でんおそろしかったんだろうな…」

親戚のごちそうの時とか、みんなとは一緒に食べないようにしとります。
こぼしたり、おかしな食べ方をすれば、他の人がおいしくなかろうと思い、
一人で台所で食べます。
でもさみしくて涙が出てしまいます…。

母が入院したのは、市立病院でも隔離病棟でした。
父と二人で付き添っていましたが、母は「伝染らんようにしてくれればよかバッテン」と願い、
父は「伝染ってもよか、親子三人ここで死のわい」と、いつも母に言っていました。

中学を卒業すると同時に妹の看病に明け暮れていた私にも、
やがて結婚を前提にとお付き合いをはじめた男性がいました。
でも男性の両親に「水俣病の妹がいる人なんて、とんでもない」と猛反対され、
とうとう結婚することはできませんでした。

水俣病になったら本当にかわいそうかよ。
このまま結婚もできず、死ぬ時は一人じゃが…。
話し相手がほしいと心から思うんです…。

昔、水俣病はマンガン中毒とか言われたでしょうが。
それで不器用とか動作の遅い子のことを子ども達が
「マンガン、マンガン」と言ってからかうとですよ。

二人の妹が入院してからは、ずっと母は病院で付き添っていました。
学校で掃除当番の時など、「奇病がうつるから、机や椅子にさわんな」と友達に言われて…。
母ちゃんがおったらと涙が止まらんかったとです…。

おばさんは、「自分が水俣病にかかると、人にうつしてしまうから…」と言って、
首を吊って死んでしもうたとです…。

「お前の母ちゃんは奇病やろ！って人が言うから、もう母ちゃんはいらん」
と、まだ幼い一人息子からまで嫌われました。
入院して親らしいこともしてやれずに、親子バラバラの生活にはもう耐えられません…。

写真【チッソ水俣工場】

店に買い物に行っても、「病気が伝染る」と言われて、米さえ売ってもらえなかった。
このつらさ、想像できますか？
お金が紙切れに感じましたよ…。

認定申請して保留の時に、熊大に入院し、教授は「まちがいなく水俣病だ」と言い、
学生さんの前で私を診察し教えていました。
しかし、国・県は、私を水俣病ではないと棄却しました。

水俣病で苦しむ父の病室にチッソの人が来て「水俣病のランク付けで来ました」と…。
「こんなに苦しんでるのに、何のランクを付けるんかい！」と怒りがこみ上げ、
もうそれだけ言うのが精いっぱいでした。

交渉の時とか、チッソが、
「本当にきつかっただろうね…」と思ってくれれば、まだいいんだけど…。
「フンおまえたちが…」っていうような…。
人の命を粗末に扱うような感じでした。

悲しみだけしか与えられない母親の気持ちは口では言えない。
チッソの皆さん代わってください…。

患者の今の心は判決だけであがなわれるものじゃなか。
ニワトリやブタじゃあるまいし、
チッソに一生、補償金のような金で飼い殺しされるようなザマも見せとうなか。

裁判で勝って補償金はもらえるようになりましたが、でもすぐ涙が出ました。
死んだ娘を金で売ったような気がして、「すまん、すまん」と思いましてな…。

わしら患者は金なんかほしくなか！
補償金の一、六〇〇万円ぐらいは一年間の漁業の仕事で稼ぎよったのだけん。
それよりもわしらを元の健康な体に返して欲しか！

近所の人は家の前で鼻をつまんだ。
入院の際もタクシーに断られ、三キロの道を、ワーワー泣きながらリヤカーを引っ張った。
急性激症型の父は、入院わずか二週間で壁をかきむしりながら息を引き取った。
カーッと目を見開いた父の遺体に取りすがり、カタキ討ちを決心した。

写真【チッソの廃水】

「わしは水俣病やけん頭をたち割ってでも調べてもらってくれ」と夫は訴えていました…。

わしらに「死ね」と言うのか…。
本当に患者の苦しみを和らげる気があるのか！

工場の排水を止め、禁漁にすべきだと言いに行ったが取り合われんやった。
本当は水俣病は数年でけりがついていたのに…。

夫は魚が大好きで朝から晩まで魚を食べていました。
取ってきたカニは紫がかった青色をしていて、「ここらのカニはきれいやね」と言っていました。
まさか水銀が含まれているとは思いもせずに…。

近くの浜辺にカキ打ちに行くと、パックリ口の開いとるカキの多してな。
娘は器用にカキを採っては、海水でパチャパチャ洗って上手に食べよった。
まだ小さかった妹にも食べさてな…。
二人はそうした生カキが好きやった。
毒が入っとるって知っとれば…。

「去年まではこげんこうはなかったばってん、赤潮ん来たつじゃろか？」
と話しよったが、水俣病のせいだとあとで分かった…。

昭和三十三年頃、ブタのお産の手伝いに行っていました。
汚染された魚を餌として食べていたブタの腹から生まれてくるのは、
たった二～三頭で、あとはほとんど袋の中で腐れていたり、奇形のブタでした。
この頃ほとんどのブタのお産がそのようだったんです。

あの頃は魚が死んで打ち上げおったでしょうが。
そげんとばネコが拾うて食いおったとな。
ネコは最初目が見えんごつなっとな、それで火の中でん跳び込みおった。
ネコは二、三時間おきに舞う（狂う）とやもんな。
それがおさまればおとなしゅうなっと。
カラスもバタバタ落ちてきおったでな。

昭和三十二年頃から、飼っていたネコが十六匹も、キリキリまって狂い、死んだとです。
もらってきて一ヶ月もすると、やっぱり狂い死にしてしまうとです。
ネコも人間もみな同じ魚や貝を食べて、狂い死にさせられたとです。

写真【水俣病でよだれを垂らすネコ】

水俣病は、伝染病・奇病あつかいされていた時期がありました。

水俣病詩集「戻らぬ命」は、水俣病公式確認から半世紀を迎えるにあたり、これまであまり表に出ることもなくひっそりと暮らし、亡くなっていった多くの患者とその家族の苦しみや悲しみの声を、人間の煩悩の数になぞらえ百八つの詩集としてまとめ、後世に伝えようと出版したものです。

この悲劇が二度と繰り返されないよう、より多くの人たちに水俣病の苦しみを知っていただくことで、被害を受けられた方々へのせめてもの慰めとなれば幸いです。

なお、ここに記した水俣病患者やその家族の思いや手記は、当時の思いがうまく伝わるようにできるだけそのままの表現で記しています。現在では不適切な表現もありますが、どうかご理解ください。

編集発行　水俣市立水俣病資料館
編集協力　水俣病資料館　語り部の会

写真【水俣メモリアル】